

別記
第3号様式

京都府教育委員会教育長 様

令和8年2月9日

コミュニティ名 医療的ケア児への教育推進チーム
代表者所属名 京都府立井手やまぶき支援学校
代表者職・氏名 教諭 大道 歩美

京都府若手教職員学び合いのコミュニティ育成支援事業報告書

次のとおり報告します。

1 コミュニティ名

医療的ケア児への教育推進チーム

2 研究テーマ

医療的ケア児への授業づくり
～ICTの活用やインクルーシブ教育を意識して～

3 研究の目的

特別支援学校に在籍する医療的ケア児は年々増加している。加えて、人工呼吸器の管理といった、特定行為以外の医療的ケアを必要とする児童生徒も学校に通うようになっており、障害の重度重複化・多様化が進んでいる。また、インクルーシブ教育の理念の元、医療的ケア児を取り巻く環境も変化している。小中学校への通学や、特別支援学校における知的障害児童生徒とのクラス編制等その在り方は多様化している。

学校における医療的ケアの教育的意義は、京都府の医療的ケアガイド等で記載されており、医療的ケア児が安心して授業を受けられるよう、教員による医療的ケアの重要性は認知されつつある。しかし、まだ授業実践例が少ない現状がある。そのため、本研究では医療的ケア児が医療的ケアを受けながらも、主体的・対話的で深い学びを実現できる授業を増やしていくために、授業の構想・授業実践を行い、授業実践例を積み上げることを目的とする。授業を構想する際には、ICTを活用し個別最適な学びの実現を意識して授業作りを行い、各校で実践した。

4 研究の成果と課題

今年度は、医療的ケア児への授業実践交流と自主学習を軸に研究を行ってきた。成果と課題は以下の通りである。

〈成果〉

①各学校における授業実践の積み上げ

対象となる医療的ケア児の認知の特性や意思表示の方法、得意な身体の動き、見え方、姿勢等、個々の実態を丁寧に把握し、それに基づいた教材・教具の工夫を心がけ、実践できた。

②他校との授業実践の交流

他校との交流をとおして、実践の成果や課題を共有し合う機会を得た。その中で、各校の実践から得られた知見をもとにキーワードを抽出することで、医療的ケア児の授業づくりにおける重要な視点や工夫のポイントに気付くことができた。

③自主学習

レポート作成や勉強会をとおして、コミュニティメンバーの医療的ケア児に対する学習指導能力やICTの活用力等の資質向上を図ることができた。

〈課題〉

①医療的ケア児へのコミュニケーション支援方法の拡充

ICT機器を活用した個別的なコミュニケーション支援の方法について、さらに模索を続けていくこと。

②授業実践数のさらなる積み上げ

医療的ケア児や重度肢体不自由児の教育に関する研修をさらに積み、各校での授業改善に活かすとともに、さらに授業事例数を増やしていくこと。

③アンケートについて

医療的ケア児への教育に対する教員へのアンケートは、本コミュニティでの研究内容を補完するものとなるよう内容を検討していく。

5 研究成果の波及方法

- ・ 京都府教育委員会主催の育成事業成果報告会での発信、論文の執筆
- ・ 校内研修での発信

6 研究（活動）実績*

年月	研究（活動）内容（具体的に記載）	活動場所
2025年7月	研究会① 顔合わせ・コミュニティの趣旨説明・各校より1学期の実践報告。	井手やまぶき支援学校
2025年8月	研究会② 各校より、2学期の授業構想発表及び協議。自由研究発表。	Teamsによるオンライン開催
2025年12月	研究会③ 各校より、2学期の授業報告及び発表。	井手やまぶき支援学校
2026年2月	研究会④	井手やまぶき支

	合理的な介助・支援をテーマに講義および演習	援学校
--	-----------------------	-----

7 予算執行状況

- (1) 旅費は、旅費執行状況報告書に記載のとおり
- (2) 図書については、受領書のとおり

8 他校へ勧めたい実践又は他校へ呼びかけたい共同研究（できるだけ具体的に）

テーマ	医療的ケア児に対する教育
育てたい資質能力	<p>医療的ケア児に対して以下の資質能力を育みたいと考え、今年度各校で授業実践を行った。</p> <p>【知識・技能】</p> <p>①コミュニケーション能力 周囲に意思を伝え、外部からの情報を取り入れる為のコミュニケーションツールを使いこなす力。</p> <p>②自身の身体の動きを最大限に生かす力 身体の使い方を学び、自分なりの身体の動きで周囲に意思を表出したり、授業に参加したりする力。</p> <p>【思考力・判断力・表現力】</p> <p>①コミュニケーション能力 自分の考えや感情を、他者が理解できる形にアウトプットする力。</p> <p>【学びに向かう力】</p> <p>①周囲と関わろうとする力 周囲の出来事や人に対して関心をもち、やってみたいという気持ちを自分なりの方法で表すことができる力。</p>

<p>実践又は研究の 具体的内容</p>	<p>今年度本コミュニティから他校へ勧めたい実践は以下の2点である。</p> <p>(1) 各校における授業実践及び分析</p> <p>本コミュニティでは、各校で授業実践及び交流を行った。8つの授業実践の事例をもとにキーワードを抽出し、以下のような具体的なポイントを確認した。これらのポイントは、医療的ケア児に関わらず、どの児童生徒にとっても重要な要素であると考ええる。</p> <p>①意思表示の幅を広げる</p> <p>医療的ケア児の意思表出方法を知り、その表出を丁寧に受けとめながら指導や支援の工夫を重ねていくことで、子どもたちの意思表出の幅を広げていくことにつながる。</p> <p>②意思表示の機会</p> <p>視線、スイッチ操作、表情、発声等様々な手段があり、どのように表出するか、可能性は無限であり、「伝えたい!」という気持ちや、伝える場面を授業内に作ることが重要である。しかし、ただ場面を作ることが重要なのではなく、自分の気持ちを発信したら他者に伝わる経験の積み重ねや、「この先生だから分かってくれる!自分の気持ちを伝えたい!」と思える関係性の構築が日常生活の中でできていなければ、授業内で力を発揮することは難しい。</p> <p>③実態の把握</p> <p>授業づくりにおいては、対象となる医療的ケア児の認知の特性や意思表示の方法、得意な身体の動き、見え方、姿勢等、個々の実態を丁寧に把握し、それに基づいた教材・教具の工夫を図ることが必要である。</p> <p>④幅広い実態</p> <p>医療的ケア児や知的障害のある児童生徒が「ただ一緒に授業を受けること」自体を目的とするのではなく、それぞれの実態やニーズを的確に把握した上で、医療的ケアがあることによって生じる制約に対してどんな工夫や手立て、環境設定ができるか考える必要がある。</p> <p>⑤同じ活動の繰り返し</p> <p>一定期間同じことをくりかえすことは知的障害のある児童生徒にとって「わかる」ことを助け、定着や般化の上で大切だが、休みが多くなりやすい医療的ケア児にとっては、年度をまたいだ繰り返しも、経験として振り返ることができるため、大切である。</p> <p>(2) ICTを活用した実践</p>
--------------------------	---

今年度本コミュニティでは、ICT機器を使用した実践について情報を共有し、交流を行った。

以下の4つのICT機器を使用し、環境設定を行ったことで、医療的ケア児が自分の身体を最大限に動かしたり、自分の意思を表出し、他者とやりとりをしたりすることができた。医療的ケア児に関わらず、ICT機器の活用は、自らの力を発揮し、他者とつながる機会を広げることができるため、他校にも広げていきたい。

①デジリハ

デジリハとは、デジタルアートとセンサーを活用した障害児者向けのリハビリツールである。ゲーム感覚で楽しみながらリハビリに取り組むことができる。

②MaBee

MaBee（マビー）コントロールモデルはおもちゃやライトなど、単三の乾電池で動く製品をスマートフォン専用のアプリでコントロールできるようになる電池型のIoT製品である。

③えこみゅ・かなトーク

「えこみゅ」とは、株式会社LITALICOが提供している、発語によるコミュニケーションが難しい子ども向けの音声付き絵カードアプリである。

「かなトーク」というアプリを用いた。「かなトーク」とは、入力した文字や文章を合成音声で読み上げる発話障害や身体障害がある方を対象としたコミュニケーション支援アプリである。

④DropTap

DropTapとは、2,000語以上の視覚シンボルが収録されており、シンボルをタップすると音声が出る仕組みとなっており、絵カードの代わりに意思表示をすることができる。